

コラム 08 — トルコ軍艦・エルトゥールル号の遭難とトルコとの友情

天皇の名によって国民に教育勅語が下賜された明治 23 年、トルコとの友情の絆を築く事件が生起します。

1890(明治 23)年 9 月 16 日、トルコ軍艦・エルトゥールル号が和歌山県串本町の沖合で遭難するという海難事件を契機にした話です。19 世紀末、ヨーロッパ列強との不平等条約に苦しんでいたオスマン・トルコ皇帝アブドゥルハミド 2 世は、明治維新後同様の立場にあった日本との平等条約締結の促進と、明治 22 年春の小松宮彰仁親王殿下、同妃殿下のトルコ訪



エルトゥールル号

問時に、皇帝が明治天皇より勲章を賜ったことに対する返礼のため、親善使節団の派遣を計画しました。団長には、オスマン海軍少将が選ばれ、使節団座乗艦としてエルトゥールル号（写真）が選ばれました。明治 22 年 7 月 14 日、イスタンブール港を出港したエルトゥールル号は、スエズ運河を抜け、途中各地のイスラム教国に教主国としての威厳を示しながら寄港しつつ、明治 23 年 6 月 7 日に横浜港に到着しました。

オスマン海軍少将一行は、明治天皇に拝謁し、トルコ皇帝から託されたトルコ最高勲章及び種々の贈り物を天皇に捧呈し、併せて両国の修好という皇帝の意を天皇に伝えました。これに対し、明治天皇は使節に勲章を授け、饗宴を賜いました。使節団一行は東京に 3 ヶ月滞在、その間官民挙げての歓迎を受け、9 月 15 日、横浜港を出港し、帰国の途につきました。日本国当局は、9 月が台風の子節であり、またエルトゥールル号が建造後 26 年を経た木造船であることから、出発前に修理を行うよう勧めましたが、オスマン海軍少将は帰途が遅れないようにと、予定通り同日出港しました。

横浜港を出た翌日の9月16日、エルトゥールル号が、和歌山県串本町の大島近海を航行中、折からの台風に遭遇し、暴風雨のため、沈没してしまいました。オスマン提督以下乗組員587人が死亡、生存者わずかに69人という海難史上まれにみる惨事でありました。暴風雨のためマストが折れ、舵が利かなくなると、錨を下ろそうとした瞬間、岩礁に衝突、船底から海水が流れ込み、蒸気機関が爆発しました。650人を超す乗組員が、荒れ狂う真っ暗闇の海に放り出され、どうにか岸に流れ着いた生存者が、断崖に生えた松をつたい、助けを求めてきました。わずか59世帯の島民が、その69人の体を温め(主に女性が裸になって自分の体温で温めたという)、欲衣を着せ、自分たちの非常食である鶏を料理した食事を与え、介抱に尽くしました。

生存者は、このあと更なる治療を受けるため、神戸に移送され、明治天皇は彼らのために侍医を派遣、皇后陛下は看護婦13名を神戸に遣わされ、彼らに白衣を賜れました。3週間後の10月5日、日本海軍の2隻の軍艦(比叡、金剛)により帰国の途につき、翌明治24年1月2日、無事イスタンブールに入港、トルコ国民の心からの感謝に迎えられました。本国に戻った乗組員は、日本人の隔てのない暖かさを語り、そして語り継がれました。

トルコ共和国の「建国の父」と呼ばれた初代大統領、ムスタファ・ケマル・アタチュルクは1937年、艦が沈んだ海を見下ろす大島の岬に、高さ13メートルの御影石の慰霊碑(写真)を建てました。中央に錨を、左にトルコ国旗、右に日本の海軍旗を配した正面のシンボルマークは、日本への友好の証でもあります。



御影石の慰霊碑

話は1985年の中東へ移ります。イラン・イラク戦争が激化した3月17日、イラクのフセイン大統領は「48時間以降のイラン上空は戦域」と宣告しました。たとえ民間機でも撃墜するということです。イランには商社マン等まだ多くの日本人がいたので、これらの人々を脱出させなければならない。

しかし、自衛隊機は当時の法律では使用できず、民間チャーター機の派遣も「安全が確保できない」ということで、間に合わない。そこで、イランの日本大使野村豊氏は欧州、中東の各国へ救援を要請しました。どこも自国のことで手一杯という中で、唯一、手を差し伸べてくれた国がトルコでありました。野村大使が、テヘラン空港近くのホテルで待機していた日本人に知らせたとき、歓声が沸きあがったそうです。日本人 262 人が、トルコ航空機で、イラン領空を脱出できたのは“デッドライン” 1 時間前のことでした。

撃墜の不安の中で座席に座る日本人に対して、「日本の皆様、ようこそ、トルコへ。ただいま当機は、イラン国境を無事通過しました」という放送が流れ、再び大歓声が沸きあがった。「エルトゥールル号の遭難」からほぼ 1 世紀、トルコ人は感謝の気持ちを忘れていなかった。トルコ人の、ほとんどが知っていて、日本人のほとんどが知らない「エルトゥールル号の遭難」であります。